

「風を食む」

作  
梅本  
隆平

登場人物

小島和哉	小園千春	佐々木龍斗	鈴木詩音	石山優斗	前田凜太郎	清水真理子	森元圭太	園田裕子	近藤良太
(3)	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	( )	(2)	(2)	(2)
8	3	3	3	9	7	2	6	6	6
歳	歳	歳	歳	歳	歳	7	歳	歳	歳
( )	( )	( )	( )	( )	( )	歳	( )	( )	( )
通り魔	佐々木の彼女	不動産の社員	不動態の社員	役者	劇作家	元役者	劇団志文の劇団員	近藤の彼女の劇団員	劇団志文の座長

○

小劇場の舞台  
劇団志文が演劇を上演している。  
舞台中央には大きなカバンが置かれていて、  
舞田役の近藤良太（26歳）が舞台に出ている。  
に置かれていて、森元圭太（26歳）が舞台に出ている。

小林 「それ君の？」

権田 「違う？」

小林 「じゃあ誰の？」

小林 「小林がカバンを持ってとうとするが権田が止める。」

権田 「何を言ってるんだよ？」

小林 「早く開けるよ。」

小林「沖繩なら水着とか色々入れるでしょ」

権田「だとしてもじゃない？」

小林「俺この前行った沖繩二泊三日はこんな量だったよ」

権田「君の基準じゃん」

小林「これでもしそうだとしたらヤバくない？」

権田「今頃、海の前で三角座りだよな」

小林「可哀想過ぎるって」

権田「流石に気づけよって話だろ」

小林「二泊あるから一日目は耐えられても二日目しんどいぜ」

権田「流石に帰ってくるだろ」

小林「今後二泊は無理になってるだろうな」

権田「これがそうだとしたらな。絶対違うから早く開けろよ」

小林「そう言い切んなよ」

権田「神に誓える」

小林「勿体無いつて」

権田「中身が大量のお金だったらどうする？」

小林「いくらぐらい？」

権田「量の問題じゃないだろ」

小林「俺田、カバンを持ち上げて重さを測る。」

小林「いくら？」

権田「三億？」

小林「持ったことあんの？」

権田「ない」

小林「じゃあわかんねーじゃん」

権田「でも大体こんなもんでしょ」

小林「財布に四万までしか入れたことないから想像つかねーよ」

権田「その七千五百万倍だよ」

小林「想像の範疇を越えまくってる」

権田「なんか俺が三億の重さ知ってる感じになっ  
てない？」

小林「君が言い出してるからね」

権田「いくら確かめるか」

小林「まだお金って確定してないでしょ」

権田「確定は見てからじゃないと無理でしょ」

小林「どうするよほんとにお金だったら」

権田「税金分俺たちで分けようぜ」

小林「現金なやつだな」

権田、カバンを地面に置きチャックを開ける。

○ 前田家

清水真理子（27歳）が筆筒の引き出しを開ける。畳んである衣服の隙間に白い粉が入った袋を見つける。

○ 商店街

中身の入ったコンビニ袋を持った小島和哉（38歳）、正気無く歩いている。

近藤の声「事実は小説に勝ると言われる。なら何故物語が作られるのだろうか」

前田凜太郎（27歳）、電話をしながら自転車を漕いでいる。

前田「もう四、五分で着きます。：これ以上は無理ですよ」

○ 石山家

玄関のドアを開ける前田、弁当を二つ持っている。リビングで待っている石山優斗（29歳）。

石山「ありがと」

前田「リビングに入る前田。リビングに入らなかつたけ？」

石山「昔やってたのは出前館の方です」

前田「もうやめたの？」

前田「アプリアは消してないっすけどね」

前田「財布を取り出す石山、前田に二千円を渡す。前田、弁当を机の上に置く。ハンバーグ弁当の二つがある。

石山「お前ミックスキ弁当？」

前田「そうっすね」

石山「お前の方が豪華じゃね？」

前田「石山さんハンバーグ弁当っすよね」

石山「そうだけどさ。お前のやつにもハンバーグ入ってんじゃん」

前田「ミックスキ選んだんで」

石山「交換します？」

石山「いやいいよ」  
石山、ハンバーグ弁当を食べだす。  
前田、ミックス弁当を食べる。

○ 小劇場の外夜  
関係者の男性と話している森元。

男性「映像は出ないの？」  
森元「出たい気持ちはありませんけどなかなか厳しいですよ」

男性「オーデションとか受ければいいじゃん」  
森元「そうですよね」

○ 小劇場の舞台夜  
開演後の舞台上に座っている近藤。

舞台上は薄暗く常夜灯のみ点いている。  
他の客は全員帰っている中、客席に座っている園田

裕子「挨拶行かなくていいの？」  
近藤「行ったほうがいいよね」

裕子「良いよ」  
近藤「重たい腰を持ち上げる近藤、

裕子「まだ帰らないよね？」  
近藤「じゃあ行ってくるわ」

客席で舞台上を見つめる裕子。

○ 小劇場の外夜  
森元が男性と話している。

近藤「今日が入って行く近藤。  
男性「良かったよ、頑張ってます」

近藤「良かったよ、頑張ってます」  
男性「次はまた来年？」

近藤「続けられたら良いですね」  
男性「もつとコンスタントにやれば良いのに」

近藤「やりたい気持ちがあったの？」  
男性「今回はどうだったの？」

近藤「全然赤ですよ」  
男性「そっか、俺も周りにもっと広めておくよ」

近藤 「よろしくお願ひします」

森元 「男性、帰って行く。お願いします」

近藤 「何パーだと思ふ？」

近藤 「周りはまだ客と演者が話している。」

森元 「ちよっと回ってくるわ」

近藤 「まだ帰んなよ」

森元 「ちやんといるよ」

近藤 「挨拶回りに行く。」  
劇場の中に入っていく森元。

○ 小劇場の舞台 夜

森元 「先に客席にいる裕子を見て、」

裕子 「まだかかりそうなの？」

森元 「もうちよっとかかるんじゃない」

裕子 「先 رفتくとか？」

裕子 「だよね」

森元 「楽屋に入っていく。」

森元 「やっぱ先 رفتところ」

裕子 「知らんよ」

森元 「腹へった」

森元 「再び楽屋に入っていく。」

○ 小島家 夜

薄暗い部屋。

室内干しされている衣服は着込まれていて薄くな

っている。

カッブラーメンを啜っている小島。

点いているテレビではニュースが流れている。

小島、ラーメンを食べながらテレビを見している。

○ 石山家 夜

机に向かつて戯曲を考えている石山。

石山 「この世の物事は何かから始まると思う？」

前田「なんすか」  
石山「ちよつとは考えろよ」  
前田「別になんでもいいですよ」  
石山「よくねえよ」

前田「なんですか？」  
石山「次やるやつで重要なセリフなんだよ」  
前田「まだ終わってないんすか？」  
石山「詰まりまくってる」

前田「怒られるやつです」  
石山「怒られたよ」  
前田「どこで詰まったんですか？」  
石山「前田に途中の戯曲を読ませる。」

○ 小劇場の外夜  
最後の一人を見送る近藤。  
周りには誰もいない。

○ 小劇場の舞台夜  
誰もいない会場を見て察する近藤。  
近藤「もう締め作業入っちゃいますね」

近藤「ありがとうございます」  
近藤「客席から掃除を始める。」  
近藤「客席から掃除を始める。」

○ 小劇場の楽屋夜  
楽屋に入って着替えを始める近藤

○ 半年後 小劇場の舞台夜  
誰もいない劇場、スタッフが掃除をしながら小言を  
話す。  
スタッフ「年の暮れ、高円寺の交差点で事件は起きる」

○ 小劇場の楽屋夜  
私服に着替えている近藤、携帯を見ると裕子からメ  
ッセージが入っている。  
“先向かってるね”  
携帯を閉じ、着替える近藤。

○ 半年後 小劇場の舞台夜

客席をモップ掛けしているスタッフ。  
一人で小言を話し続けている。  
スタッフ「一人の男性がその場で刃物を振り回した。辺りは混乱する。逃げ遅れた女性が刃物に刺さる」

○ 小劇場の楽屋 夜  
着替え終えた近藤、裕子にメッセージを入れる。  
“今から向かう”

○ 半年後 小劇場の舞台 夜  
スタッフ「警察が男を取り押さえたのは事件発生から八分後。その二分後、捕まった男は突然涙を垂らした。世間が混乱に陥るには十分だった。被害は少なかつたとはいえ一人の女性が亡くなっている」

○ 小劇場の舞台 夜  
楽屋から出てくる近藤、掃除をしているスタッフに挨拶する。

近藤「お疲れ様でした」  
スタッフ「お疲れ様でした」  
近藤「明日もよろしくお願いします」  
スタッフ「明日もよろしくお願いします」

出ていく近藤。  
掃除を続けるスタッフは舞台上のモップ掛けを始める。

○ 商店街 夜  
二人がいる店に向かっている近藤。

○ 居酒屋 夜  
森元と裕子、近藤でお酒を呑みながらご飯を食べ

ている。

森元「明日は仕事なの？」

裕子「八時に渋谷」

森元「早いね」

近藤「俺たちもそのぐらいだろ」

森元「そっか」

裕子「明日は打ち上げなの？」

近藤「明日もここだよ」

森元「ここが一番安いからね」

近藤 「(裕子に)来る？」

裕子 「さすがに行かない」

店員が餃子を運んでくる。

店員 「お待たせしました」

近藤 「すみません、レモンサワーお願いします」

森元 「じゃあハイボールも」

近藤 「(裕子に)呑む？」

裕子 「大丈夫」

注文を取り厨房に戻る店員。

○ 半年後 小劇場の舞台 夜

常夜灯のみが点いている。

舞台上で俯きながら座っている近藤以外には人が

いない。

スタッフが入ってくる。

スタッフ 「掃除入っても大丈夫ですか？」

近藤 「すみません、すぐ出て行きます」

近藤、荷物をまとめて出ていく。

○ 居酒屋の前 夜

近藤と裕子、森元が店から出てくる。

森元 「じゃあまた明日」

裕子 「頑張ってたね」

近藤 「寝坊すんなよ」

森元 「さすがにもう呑まねーよ」

見送って帰って行く。呑まねーよ

近藤と裕子が一緒に帰る。

○ 歩道 夜

並んで歩いている近藤と裕子。

裕子 「明日は何時に起きんの？」

近藤 「一緒ぐらいいに起きるよ」

裕子 「じゃあ起こして」

近藤 「アラームかけろよ」

○ 半年後 小劇場の舞台 夜

舞台上を掃除しているスタッフの小言を話してい

る。

スタッフ 「イかれてるよな」

○ 石山家 夜  
机に向かつて戯曲を書いている石山。

前田「もう支度をしている前田。」

前田「もう帰りますね」

石山「（執筆に夢中になっっている）おう」

前田「お疲れでしたー」

暫くして執筆の手を止める石山。  
机に置かれていているタバコを吸い始める。

○ 森元家 外

玄関の前に立っている真理子。

森元「帰宅した森元が気づく。」

真理子「どうしたの？」

森元「来るなら連絡してよ」

森元「森元、玄関の鍵を開ける。」

家に入る二人。

○ 石山家 夜

執筆している石山。

インターホンが鳴る。

前田だと思ひ、玄関に向かうが別の人間が立っている。

○ 歩道 夜  
並んで歩いている近藤と裕子。

タイトルイン「風を食む（仮）」

○ 小劇場の舞台

劇団志文が演劇を上演している。

舞台中央には大きなカバンが置かれている。

舞台上には権田役の近藤と小林役の森元がいる。

権田「カバンの中には何も入っていない。」

小林「何が入った？」

権田「：」

小林「何が入ってんだよ」

権田「見ない方がいいと思う」

小林「そんなにヤバイもの入ってんの？」

権田「：」

小林「おい何か言ってくれよ」

権田「俺たちはこのカバンを開けるまでに何分使った？」

小林「五分ぐらい？」

権田「そうだよ五分も使ってしまったんだよ」

小林「それがなんだよ」

権田「その五分で何をした？」

小林「カバンを開けた」

権田「五分あれば何ができると思う？」

小林「電車で二駅は進めるな」

権田「各停でな」

小林「朝飯も食い切れる」

権田「食パンならな」

小林「何が言いたいんだよ」

権田「俺たちは朝飯を食い逃すし、電車も乗り過ごしてしまっただよ」

小林「痺れを切らした小林がカバンの中身を見る。

権田「（重さを測った件について）なんだったのあれ」

小林「あの時は確かに重かったはずなのに」

権田「俺三億とか言っちゃったよ。持ったこともないの

に。恥ずかし」

小林「俺二泊三日とか言っちゃったよ。普通キャリアケ

ースだろ。恥ずかし」

小林と権田がじつとカバンを上から覗く。

権田「でもさ俺たち中身ばかり気にしててカバン自体、

何も見ていなかっただよな」

小林「：」

○ 近藤家 朝

アラームが鳴り目覚める近藤。

横で寝ている裕子を起こす近藤。

裕子「もう時間？」

近藤「時間」

近藤「立ち上がり台所に向かう。

眠い目を擦りながら起き上がる裕子。

近藤「なんか呑む？」

裕子「牛乳」  
近藤「よく飲むね」  
裕子「注ぐ近藤。」

裕子「台所に向かう裕子。」

○ 小劇場の楽屋

眠い目を擦りながら森元が入ってくる。  
先に楽屋入りしている鈴木詩音（23歳）が森元に

話しかける。「超眠いですね」

詩音「やばい、眠いですか？」

森元「寝なかつたんですか？」

詩音「寝れなかつた」

森元「楽日だから？」

詩音「そんなじゃないよ」

森元「また呼び出しですか？」

詩音「そうだ」

詩音「まだ付き合ってますか？」

森元「そんなじゃねーよ」

詩音「知ってますよ」

森元「後悔しませんよ」

詩音「まじ距離置いた方がいいですよ」

森元「森元、準備を始める。」

詩音「昨日は何用やったんですか？」

森元「別に何でもないよ」

詩音「まじ尊敬しますよ」

森元「あれは男運が悪すぎる」

詩音「問題に巻き込まれないようにしてくださいね」

森元「嘘ばっかり」

詩音「近藤が楽屋に入ってくる。」

近藤「既に準備が済んでいる近藤。」

森元「おはよ」

詩音「おはよ」

近藤「みんなは？」

詩音「みんなは？」

森元「俺も行くかな」

詩音「行ってください」

詩音「行ってください」



近藤 「いや、別に。さっき急に電話きてさ」  
森元 「まじ？ 何だった？」  
近藤 「今日チケツト余ってるか？ っ」  
森元 「え、来んの？」  
近藤 「多分ね」  
森元 「マジかよ」  
近藤 「圭太、苦手だよな」  
森元 「苦手っていうか嫌いなんだよね」  
近藤 「見てたらわかるよ」  
森元 「あのイカれ作家」  
近藤 「でも去年から公演も打ってないよね」  
森元 「どうせ飛びまくってんだろ」  
近藤 「ちやんと挨拶はしてくれよ」  
森元 「目が合ったらするよ」

○ 石山 家夕方  
机に向かって戯曲を書いている石山。  
携帯のアラームが鳴る。  
アラーム止めて執筆を止める石山。  
石山、一息ついて家を出る支度を始める。

○ 小島 家  
カーテンで日差しを遮っていて室内は薄暗い。  
部屋を片付けている小島。  
たまった皿を洗う。  
床の埃を掃除する。  
ゴミを纏めてゴミ置き場に持っていく。

○ 前田 家夕方  
ベッドの上で横になっている真理子。  
下着だけ履いている前田、筆筒の引き出しを開ける。  
粉が入った袋を取り出す前田。

前田 「お前もやる？」

真理子 「何を？」

前田 「（呆れながら）知ってんだろ」

真理子 「やめた方がいいよ」

前田 「やってみたら分かるよ」

真理子、携帯を見る。

前田 「やんの？」

真理子、ベッドから起き上がる。



近藤、携帯を机の上に置き楽屋を出ていく。  
森元も続いて楽屋を出る。

○ 小山劇場のロビー。夜

近藤 「お疲れ様です」

石山 「おう」

近藤 「ありがとうございます」

石山 「後輩の舞台だからね」

石山 「鈴木（詩音）目当てじゃないんですか」

近藤 「また感想聞かせてください」

石山 「特になんもですわね」

近藤 「じゃあまた誘うわ」

近藤 「去った石山を確認して森元が来る。」

森元 「ボロクソ言われてるからおあいこだよ」

近藤 「何してんだよ」

森元 「鈴木に楽屋出ないように伝えておいた」

近藤 「そんなんじゃねえよ」

森元 「てかなんで観にくんだろ」

近藤 「何気なく毎回来てくれてるよ」

真理子 「冷蔵庫を開ける真理子。」

前田 「腹減ってない」

真理子 「腹減ってない」

前田 「別にいいよ」

真理子 「携帯を見ている前田。」

前田 「特に大丈夫」

真理子 「携帯を見ていく。」

○ 小劇場のロビーに夜。  
近藤 「近藤と森元が話している。」  
近藤 「てか真理子さんは？」  
森元 「来るとか俺に聞くんだよ。」  
近藤 「特に何も。来ないの？」  
森元 「やめてから一回も来てないしね」

○ 交差点の夜。裕子、信号に引っかかる。

○ 道。自転車を漕いでいる真理子。

○ 交差点の夜。ポーターと宙を見ている小島。  
ポーター 「信号が青に変わるが小島だけ歩き出さない。」  
小島 「やがて信号が赤に変わる。」  
ポーター 「振り返る小島、ポケットからナイフを取り出す。」

○ 小劇場の舞台。舞臺上には演出で風が強く吹いている。

権田 「真田役の詩音が舞臺上に出てくる。」  
小林 「この風はどこに向かって吹いていると思う？」

権田 「目的の風はどこの向かっているか？」  
小林 「風の吹く方へ進んでみたら。そしたら終わりがわ

かりたいだけだ。」  
権田 「全部じゃなくっていいんだ。何か一つでも答えが知

客席に座っている石山。

○ 前田家の夜。ベランダに行き、タバコに火をつける前田。

○ 交差点付近の夜。自転車で乗っている真理子。

○ 交差点 夜  
ナイフを持っている小島に周りが気づき出す。  
仕事終わりの裕子がその場に出会ってしまう。  
小島、焦点がどこにも合っていないが裕子の方へと  
近づいていく。

○ 小劇場の舞台 夜  
舞台上にいる三人。

先程より風の勢いが増している。

小林「君の知りたい答えは何？　そもそもそこに問いは  
あるのかい？」  
風が止む。

○ 取調室

事情聴取を受けている小島。  
警察の質問に何も答えない。  
近藤の声「物事はいつも突然訪れる。切っ掛けは誰にも  
分からない」

一ヶ月後

○ 石山家 夜

前田に戯曲を読ませている石山。  
石山「無言に耐えきれずタバコを吸い出す。  
机の上には食べ終えた弁当が二つ置いてある。  
前田「読み終える。」

石山「どう？」

前田「これ実際の事件から引用したんすか？」

石山「着想はな」

前田「僕出してくれるんすか？」

石山「：考えとくよ」

前田「いや出してくださいよ」

石山「出すよ」

タバコの火を消す石山。  
前田「戯曲を机の上に置き、タバコを吸い始める。

石山「日程は決まってるんすか？」

前田「決まったら言ってくれとくよ」

石山「お前は暇だろ」

前田「失礼な」  
石山「机の上の戯曲を回収して読み始める。」

前田「どこが？」  
石山「取り調べされてるところのセリフとか」

前田「：」  
石山「：」

前田「（安心して）良かったっす」

石山「真理子ちゃんあれから大丈夫なの？」  
前田「最近は落ち着いてますよ」

石山「よかったな」  
前田「まあ、実際出会しちゃってますからね。しかも知

り合い死んでるし」

石山「大変だな」  
前田「想像すると僕もキツイですよ」

石山「なんでお前が想像すんだよ」  
前田「別に想像ぐらいさせてくださいよ」

○ 居酒屋 夜

詩音「森元と詩音が呑んでいる。  
森元「来ねーよ」  
詩音「来ないんすか？」

詩音「呼んだんすか？」  
森元「呼んでない」

詩音「何してんすか？」  
森元「呼びづらんすか？」

詩音「このまま距離置くんすか？」  
森元「置いてるつもりないけど」

詩音「バリバリ置いてますけどね」  
森元「元気なのが余計辛いんだよ」

詩音「友達なんですか」  
森元「友達なんですか」

詩音「友達が呼んでましたよ」  
森元「友達が呼んでましたよ」

詩音「今日はいいよ」  
森元「今日はいいよ」

詩音「店員、注文した串を持ってくる。」  
森元「店員、注文した串を持ってくる。」

詩音「詩音、裕子のことを思い出さう。」  
森元「詩音、裕子のことを思い出さう。」

森元「今日も付き合うよ」

○ 前田家 夜

前田「前田が帰宅する。」

真理子「台所で調理している真理子。」

前田「起きてたの？」

真理子「お腹すいたの？」

前田「何作ってたの？」

真理子「俺も食べよっかな」

前田「今日、仕事は？」

真理子「そっか」

前田「そっか」

○ 道 夜  
呑み終えた森元、帰路についでいる。

石山「何してんの？」「石山に見つかっている。」

森元「コンビニ行ってたか？」

石山「夜食だ。晩飯で食べたの？」

森元「そうっすね」

石山「呼ばないでしょ」

森元「来ないでしょ」

石山「嘘じゃないっすか」

森元「近藤と呑んだの？」

石山「いや近藤じゃないです」

森元「じゃあ誰？」

石山「役者仲間です」

森元「あれから近藤はどうなの？」

石山「どうなの？」

森元「はぐらかすなよ」

石山「マジでわかんないっすよ」

森元「連絡してみよっか」

石山「やめた方がいいよっすよ」

森元「森元」

石山「森元」

森元「森元」

石山「なんで？」

森元「： やっぱり僕は石山さん嫌いっすわ」

石山「いきなりなんだよ」

森元「別に連絡してもいいっすけど、いらんことしないでくださいよ」

石山「わかってるよ」

○ 近藤家 夜

カップラーメンを啜っている近藤。

テレビで流れているニュースを流し見している。携帯に着信が入るが気づいていない。

二ヶ月後

○ 小劇場の舞台

他の劇団が公演を行なっている。

舞台上には取調室のセットが組んである。

刑事が木島という人物に取り調べを行なっている。

木島「関係のある人って誰ですか？」

刑事「質問を変える。どうして事件を起こした？」

木島「どうしてやったか？ どうしてこうなったか？ 僕が聞きたいですよ。理不尽にもずっと耐えてきた。耐えてきたんです。僕のことを理解してくれる人なんて誰もいない。理解したいなら、僕が起こしたこの理不尽を理解してください。あなた方は耐えられますか？」

刑事「理解し難い。理解しようとも思わないね」

木島「ならこの取り調べは即刻終わりにしましょう。会話を続ける意味がない」

刑事「なら最後に一つだけ聞かせてくれ。君が一番憎んでいるものはなんだ？」

木島「それを聞いて何がわかるんですか？」

刑事「なら、それは解消されたか？」

木島「地続きですよ。切っても切っても憎悪は湧き出てくる。やがて僕も誰かの憎悪によって殺されるんです」

刑事「君が起こした事件も意味のなかったことなんだな」

木島「世の中に意味のないことなんてありません」

刑事「君が刺した女性が亡くなったそうだ」

木島「そうですか」

刑事「何か思うことはあるか」

木島「申し訳ない気持ちですわね」

刑事「ふざけるのはよそう」

木島「至って真剣ですよ。僕が殺めてしまったのだから」

刑事「ならなんで刺したんだ」

木島「僕は神に怒られますかね？ 人間が人間の生き死

にを決めてしまったのだから神様もさぞご立腹でし

よう」

刑事「殺されるかもな」

木島「それなら本望ですよ。最後に神と対話でもしてみ

たいな」

刑事「何を聞きたいんだ」

木島「どうして僕を産んだのか」

刑事「母親に聞いてみたらどうだ」

木島「無理ですよ。聞いても答えは分かっている」

刑事「産まなきゃよかった」

木島「酷いですわね」

刑事「合ってるだろ？」

木島「おそらくは。それ以上の答えが返ってきたら面白

いですわね」

刑事「俺が聞いてきてあげようか」

木島「興味が湧いてきました。僕が死ぬまでにお願いし

ても良いですか？」

刑事「それ以上の答えが返ってきたら教えてあげるよ」

木島「他の答えも考えておきます」

○ 元小島家

今は人が住んでおらず売りに出されている。

近藤、不動産社員の佐々木（23歳）と内見してい

る。

佐々木「日当たりは良いんですね」

佐々木「室内を見ている近藤。」

佐々木「この広さの割には家賃も低くなっていると思いま

す」

近藤「駅からは何分なんですか？」

佐々木「資料を確認する佐々木。」

佐々木「十分弱ですね。割と小道進んだらもっと早く着

くと思いますよ」

近藤「近いんですね」

佐々木「検討されますか？」

近藤「そうですね」

○ 回想 居酒屋の外 夜

呑み終わった劇団員たちが外で屯している。

近藤 「詩音はかなり酔っている。ありがと」

劇団員達 「お疲れ様でした」

詩音 「この後どうしますか？」

森元 「もう解散だろ」

詩音 「えー」

近藤 「じゃあ帰りますか」

詩音 「二人は駅ですか？」

近藤 「いや歩いて帰るよ」

詩音 「じゃあ圭太さんと二人か」

森元 「なんだよそれ」

近藤 「じゃあ気をつけて」

詩音 「（裕子に）また絶対呑みましようね」

裕子 「もちろん」

森元 「じゃあまた！」

近藤 「ありがとね」

森元と詩音と一緒に帰っていく。

○ 回想 歩道 夜

詩音 「森元と詩音が歩いている。

森元 「もう一件行きますか？」

詩音 「行かない」

森元 「なんでですか」

詩音 「充分呑んだでしょ」

森元 「足らないです」

詩音 「嘘つけよ」

森元 「あの二人は一緒に帰ったんですもんね」

詩音 「そうでしょ」

詩音 「いいいな」

○ 回想 コンビニ前 夜

コンビニから出てくる近藤と裕子。

近藤 「アイスを食べながら帰る二人。慌てて食べる。

裕子 「早くない？」

近藤 「早く溶けて慌てて食べる。」

裕子 「早くない？」

近藤 「早く溶けて慌てて食べる。」

裕子「下から取ったからね」  
近藤「最悪」

○ 近藤家 夕方  
家に帰ってくる近藤。  
持っていた袋にはアイスが二つ入っている。  
一つを冷凍庫に入れて、もう一つを食べ始める。  
アイスを食べ終え、机に向かう近藤。  
便箋を取り出し文字を書き始める。

○ ファミレス 夜  
仕事終わりの佐々木と小園千春（23歳）がご飯を

佐々木「人殺しの家なんてどう売れば良いんだよ」

千春「その人は契約してくれそうなの？」

佐々木「多分するね」

千春「よく住むね」

佐々木「うまいこと濁してるからね」

千春「その人は知らないんじゃないの？」

佐々木「近所から引越すらしいから流石に知ってるでし

よ」

千春「なおさら変わってない？」

佐々木「あれは彼女に振られて急いで家探してるたちだ

な」

千春「それなら別の街で探せよ」

佐々木「確かにね」

佐々木「ドリンクバーに行く。

○ ラーメン屋 夕方

前田「ラーメンを啜っている石山と前田。

石山「結局、公演はいつになるんですか？」

前田「配役はどうなりました？」

石山「まだ何も」

前田「俺入りそうですか？」

石山「ないかもな」

前田「マジで言ってます？」

前田「ラーメンを啜る石山。

石山「俺も頑張ってみるよ」

前田「マジでやってくださいよ」

○ 道 夜

石山「お疲れ様でした」

石山「お疲れ」

石山、目の前から知った顔の男性が歩いて来るのに  
気づき走って逃げる。  
男性、走って石山を追いかける。

○ 居酒屋 夜

働いている森元。

カウンターで呑んでいる詩音。

詩音「決まったんすか!」

森元「さっき近藤から連絡来てた」

詩音「同じ内容するんすか?」

森元「新しく書くって言ってたけど」

詩音「できんですか?」

森元「わかかね」

詩音「手伝ったら良いじゃないですか」

森元「俺は無理だな」

詩音「日程はいつなんですか?」

森元「三ヶ月」

詩音「無理でしょ」

森元「でも良いタイミングだったんじゃない?」

詩音「良い方向に行けば良いですね」

森元「石山さんも参加するらしいよ」

詩音「マジっすか」

森元「絶対イヤですよ。近藤さんの方出たいですよ」

○ 前田家 夜

ベッドで寝ている真理子。

前田、風呂に入っている。

真理子、音で目覚める。

風呂から上がって来る前田、起きている真理子を見

て、

前田「ごめん、起こしちゃった?」

真理子「おかえり」

前田「ただいま」

前田「真理子、携帯を触る。」  
真理子「今日、圭太来たの？」  
前田「いや別に。」  
真理子「来てないよ。」  
前田「そっか。」

○ 小劇場の舞台

他劇団が上演している。

先程、取り調べを受けていた木島が留置所で手紙を書いている。

鳥に扮装した配達員のサンドが出てくる。

サンド「その手紙は誰に届けるの？」

木島「どうして君に言わなきゃいけないんだよ。」

サンド「僕が届けるからさ。」

木島「君にできないだろ？」

サンド「俺の仕事は届けることだ。それを取り上げられたら俺に価値は見出せない。」

木島「自信なのか悲観なのかわからないな。」

サンド「どっちもちよつとずつ持ち合わせてるよ。」

木島「この手紙に住所はない。それでも可能か？」

サンド「届ける相手がいるならどこでも可能だね。」

木島「どうやって？」

サンド「企業秘密、企業はしてないけどね、鳥だけだね。」

木島「怪しいヤツだな。」

サンド「人生で一度は怪しいヤツに託すことも大事だよ。」

木島「お金は？」

サンド「届けた後にもう一度交渉に伺うよ。」

木島「ふざけたヤツだな。」

木島「君がそれを聞くのか？」

サンド「君がそれを聞くのか？」

木島「確かにな。」

サンド「そういえば君の名前を聞いていなかった。」

木島「俺の名前はサンドだ。」

サンド「由来は？」

木島「聞いていないな。」

サンド「なぜ？」

サンド「生まれた時からそう呼ばれていたから何も思ったことはないな。」

木島「今まで届けられなかったことはあるか？」

サンド「二度ある」

木島「あるのかよ」

サンド「二度あることは三度あるってな」

木島「不吉だな」

サンド「じゃあ行ってくるよ」

木島「ちよつと待って、二回届けられなかった理由は？」

サンド「向こうが拒んだ時だな」

木島「：」

サンド「今回もそういう類か？」

木島「君の目で判断してくれ」

サンド「判断は苦手だ」

木島「君を信じるよ」

サンド「君を信じるよ」

木島「君の目には僕がどう映ってる？」

サンド「正直に言ってもいいのか」

木島「その方がいい」

サンド「俺の目に映るお前は人ではないな」

木島「じゃあ何に見える？」

サンド「君の頭にはツノが生えている」

木島「それだけか？」

サンド「それは十分残酷なことだよ」

木島「次会う時、もう一度聞かせてくれ」

サンド「気楽にやってくれ。手紙は何枚でも書ける」

サンド「任せとけ」

○ 回想 近藤家 夜

リビングでお酒を呑んでいる近藤。

風呂上がりの裕子、冷蔵庫から缶チューハイを取り

出す。

近藤「呑むの？」

裕子「風呂に入ったら酔いが醒めた」

裕子「近藤と呑み始める。」

○ 石山家 朝方

石山、家に帰って来る。

そのまま布団に倒れ込む。

○ 歩道 朝



近藤 「なんか呑む？」  
森元 「呑むなら呑むよ」  
近藤 「：」

○ 回想 歩道 夜

森元 「歩いている近藤と森元。」

近藤 「今日やってたっけ？」

森元 「ワンチャン閉まってるかも」

近藤 「金曜なら流石に空いてるよな」

近藤 「：」

近藤 「俺たちはフィクションを現実だと理解しなきゃいけないよな」

森元 「それがリアルだって言いたいんだろ」

近藤 「いや、フィクションは所詮想像の範疇だよ」

森元 「なら理解しなくてもいいんじゃないの？」

近藤 「次の舞台で俺は小島を殺すよ」

森元 「まじ？」

近藤 「そのために理解しようと思う」

森元 「やめておいた方がいいんじゃない？」

近藤 「それが唯一捕まらない方法だろ」

森元 「小島役は誰がやるの？」

近藤 「俺がやるつもり」

森元 「意味わかんねーよ」

近藤 「小島が捕まった時なんて言ったと思う？」

森元 「ごめん、覚えてない」

○ 近藤家 朝

リビングで寝落ちしている近藤。

机の上には便箋が置かれている。

便箋の内容

“物事はいつも一つの不条理で始まる”

○ 交差点 普通通りの交差点。

○ 回想 小劇場の前

裕子 「近藤と裕子が出てくる。」

近藤 「確実にね」

裕子「ドロドロだった」  
近藤「人間の愚かさを描いてるんだって」  
裕子「別に良いのにね」  
近藤「え？」  
裕子「物語ぐらい希望もったっていいじゃん」

三ヶ月後

○稽古場  
近藤と劇団員が集まっている。  
近藤「演劇祭に向けての本読みを行なっている。」

○稽古場の喫煙所  
詩音と森元が話している。  
詩音「マジでこれやるんすか」  
森元「そうらしいね」  
詩音「そうらしいね」  
森元「良太らしいよ」  
詩音「圭太さんは何知ってんすか」  
森元「なんも知らないよ。聞いてもあいつは何も言わな  
いからね」  
詩音「：」  
森元「忘れられないんだよ」

○不動産屋  
上司に話しかけられる佐々木。  
上司「あれからあの家どうなった？」  
佐々木「結局無しになりましたよ」  
上司「やっぱりそうだよな」  
佐々木「二人ともどうせ面白がりですよ」  
上司「迷惑だな」

○石山家  
玄関のインターホンが鳴らす前田。  
中からの反応が無い。  
もう一度インターホンを押す。  
暫くしても反応が無い。  
前田「ドアを力強く殴る。」

男性が前田に話しかける。

男性「いないか？」

前田「：どうせ居留ですよ」

男性「じゃあドア壊す？」

前田「え？」

男性「嘘だよ、捕まっちゃう」

前田「：」

男性「君も回収しに来たの？」

前田「なんのっすか？」

男性「なんでもない」

男性「帰って行く。」

○ 稽古場

稽古場に戻ってくる森元と詩音。

○ 回想道夜

呑み終えた近藤と森元が歩きながら話している。

近藤「（次の舞台の内容）面白いかな」

森元「まだわかんねーよ」

近藤「もしお前が俺の立場だったらどうする？」

森元「少なくとも同じことはしないかな」

近藤「別に俺も正気化はするつもりないよ。ただあのま

んまでは終わりに付き合おうよ」

森元「最後まで付き合おうよ」

○ 小劇場の舞台

志文の公演が行われている。

舞台上には近藤と詩音がいる。

近藤の前で倒れている劇団員。

近藤「どうしてって聞かないの？」

詩音「私の欲しい答えが返ってくると思わないからね」

近藤「意味は後からついてくると言うけどまだ来ないみ

たいだね」

詩音「ただこれしかなかったんでしょ」

○ 不動産屋

佐々木、上司に話しかける。

佐々木「あの家売れそうですよ」

上司「まじ？ 誰？」

佐々木「今年上京してくる学生です」

上司「安くしといてよかつたな」  
佐々木「何も知らないんで大丈夫ですよ」

○ 前田家 夕方  
ベッドの上には並んで座っている真理子と前田。

真理子「かわいそうだよね」

前田「誰が？」

真理子「私たち」

前田「今だけだよ」

○ 裏路地 夜

ボコボコにされた石山が寝そべっている。  
ポケットからタバコを取り出して火をつける。

○ 回想 道 夜

森元と石山が話している。

石山「どうして学校では発散方法を教えてくれないのかね」

森元「なんの発散ですか？」

石山「感情の全部。大人になってからじゃ遅いよな」  
森元「普通に生きればいいじゃないですか」

○ 裏路地 夜

タバコを吸っている石山。  
小島らしき人物が目の前を通り過ぎる。

○ 取調室

取り調べを受けている小島。

小島「ただ最後にやってみただけです。どうせ死ぬんですから」

○ 小劇場の舞台

公演を行っている近藤と劇団員。  
舞台上には近藤と詩音、劇団員が立っている。  
警察に扮した劇団員に捕まっている近藤。

劇団員「(近藤に) 歩け」

近藤「この世の物事は何かから始まると思いますか？」

劇団員「そんなの考えたこともないな」

近藤「物事はいつも一つの不条理から生まれるんですよ」

劇団員「ならお前が起こしたこともその一つってことか」

近藤「そして今度は僕が殺される番だ」

劇団員「安心しろお前は殺されん」

近藤、客席を見ると裕子が座っているのに気づきその場で立ち竦む。

劇団員、近藤の異変に気づく。

劇団員「：」

近藤「この世界は現実ですか？」

劇団員「当たり前だろ」

客席に近づいていく近藤。

近藤「（裕子に）なら、僕は今、君に触れたら君はこの世界に」

詩音も近藤の異変に気づく。

近藤、客席に降りていく。

詩音「（劇団員に）早く連れてって」

近藤、裕子が座っている客席の前で立ち止まる。

近藤「（裕子に）お願いがあるんだ。」

劇団員、近藤の元へ行く。

詩音「もう十分だよ」

近藤、裕子に触れようとするが手が止まる。

近藤、感情を抑え戯曲に戻る。

近藤「（詩音に）君にはこの世界で生きて欲しい」

劇団員に連れられていく近藤。

○ 半年前 小劇場の舞台

常夜灯のみが付いている。

舞台上に座っている近藤と客席に座っている裕子。

裕子「挨拶行かなくていいの？」

近藤「行ったほうがいいよね」

裕子「良いよ」

重たい腰を持ち上げる近藤、

近藤「まだ帰らないよね？」

裕子「うん」

近藤「じゃあ行ってくるわ」

客席で舞台上を見つめる裕子。

暫く経ち、舞台上に上がる裕子。

振り返り、客席を見る。

○

小劇場の舞台

公演を続けている劇団。

詩音が台詞を話している。

詩音「世間が混乱に陥るにはこの時間、たったの十分だ  
った。だけど立ち止まるには十分なほどこの世界には  
理由があった」

○

歩道 夜

並んで歩いている近藤と裕子。

× × ×

独りで歩いている近藤。

完